

# 読む**中学**進学



複数の要素による

'16 年度入試の動向分析



森上教育研究所 学校アドバイザー  
小泉壮一郎

2015/03



リーマンショック以降の受験者数推移と2016年の動向を「学校ランク」、「学校所在地」、「学校種別」、「付属校・進学校・半付属校」、「私立・国立・公立校」の5要素に分類し、'16年度入試の動向を探るための多角的な分析を行います。その動向を探るためには、リーマンショック直後の'09年度入試における1都3県の受験者数を起点(100%)とし、'09～'15年度入試の受験者数増減率を分析することが必要です。また、受験者数増減率だけでなく受験者数前年対比を分析することで、これまでの傾向から今後を推測でき、'16年度入試の動向が明確になります。

学校ランク別受験者数の動向を見ると増加になるランクが増えることが考えられます。受験者数前年対比('10～'15年度)の推移(資料1)を見ると、先に分析したように、'12年度から徐々に二極化傾向が緩和されてきました。'15年度は二極化傾向が消滅し、F・Gランク以外は受験者数が増加しました。受験者数が減少する局面では中下位校の受験者数前年対比は難関・上位校よりも減少する傾向となりますが、受験者数が増加する局面では、全く逆の現象が起こります。

リーマンショック以降6年間の受験者数減少を見ると(資料2)、全体では20.8%の減少となったことがわかります。しかし、難関・上位ランクでは減少率が少なく、中下位のF・G・Hランクでは40～65ポイントも受験者数が減少していて、6年間の累積では二極化が見られます。全体としては、受験者数の減少で中学受験はやさしくなったことは確かですが、難関・上位校では、それほどやさしくなったわけではないことがわかります。これらの分析から、'16年度入試における学校ランク別の動向を予想すると、学校ランクによらず、全体的に増加すると考えられます。中下位校の中には難関・上位校よりも受験者数前年対比が増加する学校もあると予想できます。

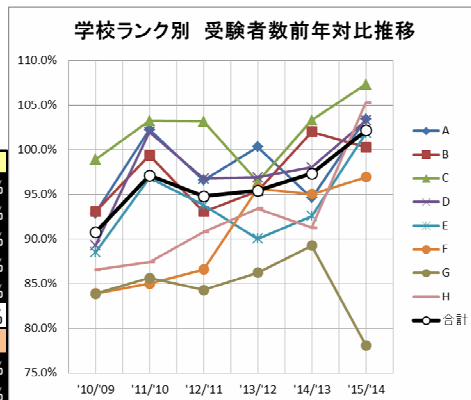
〈資料1〉学校ランク別 受験者数前年対比推移

- 表示: 受験者数が比較的多い(前年対比が100%以上、※H27/H21が90%以上)
- 表示: 受験者数が比較的少ない(前年対比が90%未満、※H27/H21が70%未満)
- 参考データ(受験者数1,000名未満のため) <小さく斜体で表示>

例:	<b>102.7%</b>
例:	<b>88.4%</b>
例:	<i>95.5%</i>

- 半付属校: 系列校大学推薦進学が30%～69% 進学校: 同30%未満 付属校: 同70%以上
- 学校ランク: 四谷大塚偏差値
- A65以上、B64～60、C59～55、D54～50、E49～45、F44～40、G40未満、Hは非エントリー
- 北東部東京: 北、板橋、足立、葛飾、荒川、台東、墨田、江東、江戸川区

	'10/'09	'11/'10	'12/'11	'13/'12	'14/'13	'15/'14	
学校 ラン ク	A	92.9%	102.2%	96.6%	100.3%	94.6%	103.5%
	B	93.0%	99.3%	93.1%	95.4%	102.0%	100.3%
	C	98.9%	103.2%	103.2%	96.4%	103.3%	107.3%
	D	<b>89.2%</b>	102.0%	96.7%	96.9%	98.0%	103.3%
	E	<b>88.5%</b>	96.9%	93.8%	90.0%	92.6%	101.8%
	F	<b>83.9%</b>	<b>85.0%</b>	<b>86.6%</b>	95.7%	95.0%	96.9%
	G	<b>83.8%</b>	<b>85.6%</b>	<b>84.3%</b>	<b>86.2%</b>	<b>89.2%</b>	<b>78.1%</b>
	H	<b>86.5%</b>	<b>87.4%</b>	90.8%	93.4%	91.3%	105.3%
	合計	90.7%	97.1%	94.8%	95.4%	97.3%	102.2%





〈資料2〉受験者数増減率（H21を100%としたとき '15/'09）

		'15/'09
学校 ラン ク	A	90.0%
	B	83.9%
	C	112.6%
	D	86.4%
	E	68.2%
	F	54.4%
	G	36.4%
	H	61.6%
	合計	79.2%

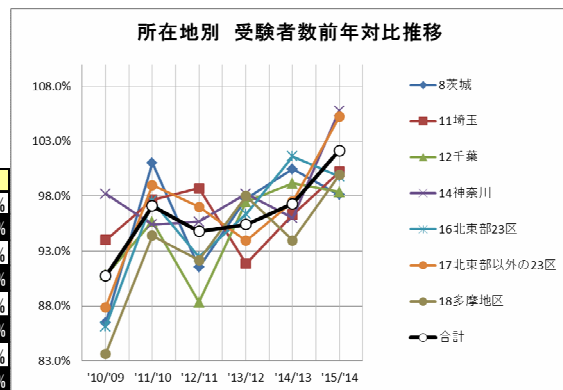
所在地別受験者数の動向の動向を見ると予測は難しいのですが隔年現象が考えられます。過去6年間を振り返ると、毎年、受験者数が大幅に減少する地域が変わっています。しかし'15年度はどの学校所在地も増加または横ばいとなり、首都圏全体が増加傾向になったと言えます〈資料3〉。

毎年激減する学校の所在地が変わるせいか、6年間で受験者数の減少率は平均化していますが、神奈川と多摩地区で20ポイントの差があります〈資料4〉。

'14年度と'15年度の前年対比を比較すると、ほとんどの所在地で隔年現象が見られます。'16年度入試でも隔年現象があるとすれば、所在地別受験者数前年対比は'15年度と逆の増減となる可能性があります。

〈資料3〉所在地別 受験者数前年対比推移

		'10/'09	'11/'10	'12/'11	'13/'12	'14/'13	'15/'14
所在地	8茨城	86.5%	101.0%	91.5%	97.8%	100.5%	98.1%
	11埼玉	94.0%	97.7%	98.7%	91.9%	96.3%	100.2%
	12千葉	90.8%	95.7%	88.3%	97.5%	99.2%	98.4%
	14神奈川	98.2%	95.4%	95.7%	98.2%	96.0%	105.8%
	16北東部23区	86.1%	97.6%	92.5%	96.4%	101.6%	99.8%
	17北東部以外の23区	87.9%	99.0%	97.0%	93.9%	97.5%	105.2%
	18多摩地区	83.6%	94.4%	92.2%	98.0%	94.0%	99.9%
	合計	90.7%	97.1%	94.8%	95.4%	97.3%	102.2%



〈資料4〉受験者数増減率（H21を100%としたとき '15/'09）

		'15/'09
所在地	8茨城	77.0%
	11埼玉	80.4%
	12千葉	72.9%
	14神奈川	89.4%
	16北東部23区	75.9%
	17北東部以外の23区	81.3%
	18多摩地区	66.9%
	合計	79.2%



学校種別受験者数の動向を見ると、サンデーショックの反動で女子校・共学校の受験者数が減少することが考えられます。女子校・共学校の受験者数は、サンデーショックの影響で'15年度は増加しました。特に女子校では急増しましたが、'16年度は急減すると予想されます。前回のサンデーショックここで注意すべきことは、サンデーショックの影響で女子校・共学校の受験者数が増加したように見えますが、実際には受験する学校数が増えてだけで、女子校・共学校を志望する受験生全体の数が増えるわけではありません。翌年に女子校・共学校の受験者数が減るように見えるのもサンデーショックの影響で増えた受験する学校数が元に戻るだけなのです。

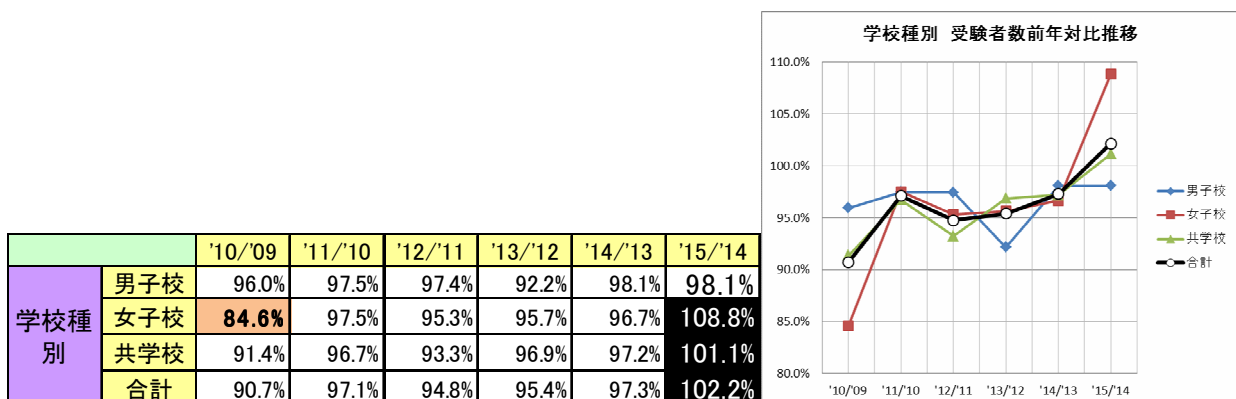
前回のサンデーショックの'09年度では、'15年度と同程度、女子校と共学校の受験者数が増加しました。そしてサンデーショックの翌年となる〈資料12〉の'10/'09を見ると女子校は84.6%、共学校は91.4%に減少しています。'10/'09は、リーマンショックによる受験者数の減少があったので、顕著な減少となりましたが、'16年度はそれほど大きな減少とはならないと思います〈資料5〉。

'10/'09では男子校と女子校の受験者数前年対比には大きな差がありましたが、6年間で受験者数の減少率は平均化して男子校・女子校・共学校の差がほとんどなくなりました〈資料6〉。

〈資料5〉'09年度と'15年度のサンデーショック対比

	H20 2008年	H21 2009年	H21/H20	
男子校計	26,379	25,214	95.6%	
女子校計	25,122	27,343	108.8%	
共学校計	50,183	50,959	101.5%	
合計	101,684	103,516	101.8%	
	H26 2014年	H27 2015年	H27/H26	
男子校計	19,685	19,309	98.1%	-2.5%
女子校計	18,459	20,092	108.8%	0.0%
共学校計	42,708	43,192	101.1%	0.4%
合計	80,852	82,593	102.2%	-0.4%

〈資料6〉学校種別 受験者数前年対比推移





〈資料7〉受験者数増減率（'09を100%としたとき '15/'09）

		'15/'09
学校種別	男子校	80.8%
	女子校	79.2%
	共学校	78.5%
	合計	79.2%

付属校・進学校・半付属校別受験者数の動向を見ると進学校はやや減少し、付属校・半付属校は増加することが考えられます。'15年度入試で進学校の受験者数が増加したのは、女子校と共学校によるものでした。サンデーショックによる影響が大きかったのだと思います。しかし、付属校・半付属校でも女子校は受験者数が増加したのですが、共学校は顕著な減少となりました。

大学付属校は学費が高いことから、不況の影響を受けると考えられていましたが、'11年は、付属校の安定性を求め、むしろ受験者数前年対比は高かったことがわかります。しかし、'15年度入試では景気が回復してきたにもかかわらず付属校の受験者数が減少したのは景気の回復がまだ十分ではないということでしょうか〈資料8〉。

過去6年間の付属校・進学校・半付属校の受験者数増減率〈資料9〉を見ると、相対的に進学校は受験者数の減少が少なく、付属校・半付属校減少が多いことが分かります。付属校は学費が高いため、半付属校は生徒の成長に伴い、系列校に進学するか、他大学受験をするか選択できるメリットがありますが、進路が中途半端になるリスクもあるため敬遠されたのではないのでしょうか。

'16年度入試では、サンデーショックで受験者数が増加した反動で進学校は減少し、前年に減少した反動で付属校・半付属校は増加することが考えられます。付属校はこの6年間に大幅な受験者数の減少となりましたが、景気の回復が本格的になれば増加することも考えられます。

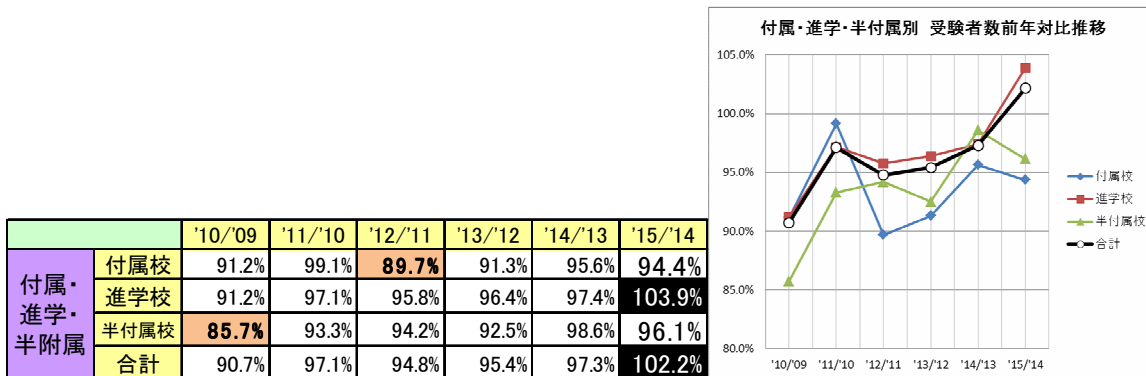
〈資料8〉付属校進学校半付属校と学校種別受験者数前年対比

受験者数前年対比 H27/H26

		学校種別			
		男子校	女子校	共学校	合計
付属校	付属校	92.7%	113.2%	94.3%	94.4%
進学校	進学校	99.9%	108.7%	103.2%	103.9%
半付属校	半付属校	96.1%	109.0%	90.0%	96.1%
	合計	98.1%	108.8%	101.1%	102.2%



〈資料 9〉 付属・進学・半付属別 受験者数前年対比推移



〈資料 10〉 付属・進学・半付属別 受験者数増減率（'09を100%としたとき '15/'09）

		'15/'09
付属・ 進学・ 半付属	付属校	<b>66.8%</b>
	進学校	<b>82.7%</b>
	半付属校	<b>66.1%</b>
	合計	<b>79.2%</b>

私立・国立・公立校別受験者数の動向を見ると私立は横ばい、国立は減少し、公立は増加することが考えられます。'15年度入試では、私立が増加、国立が横ばい、公立が顕著な減少となりました。私立が増加したのはサンデーショックによる影響で、実質は横ばいまたは微増でした。国立は横ばいでしたが、公立が減少したのは、実倍率（受験者数÷合格者数）が高すぎるためと考えられます。実は、首都圏の私立校では、'15年度入試でサンデーショック以外に異変がありました。公立校で行われている「適性試験」を私立校でも行う学校が大幅に増え30校を越えたのです。首都圏の私立校約300校の10%以上が「適性試験」を行ったこととなります。これまでは、公立中校の練習として私立校の「適性試験」を受験するので、私立校に入学する受験生はほとんどいないと考えられてきましたが、これほど多くの私立校が「適性試験」を行っていることを考えると、「適性試験」を受験して私立校に入学していると思われます〈資料11〉。公立校に合格することが困難なために「適性試験」で受験できる私立校に志望校を変更した受験生もいるのではないのでしょうか。そうであれば、公立校の受験者数が減少していることも納得できます〈資料12〉。

首都圏の私立・国立・公立校が6年間にどれだけ受験者数が増減したか〈資料13〉を見ると、私立・国立・公立校全体では、過去6年間に20ポイント以上も受験者数が減少したこととなります。最も減少したのは公立校で、減少が比較的少なかったのが私立校という結果で、リーマンショック以降の不況が受験者数減少の原因なはずですが、学費の高い私立校よりも倍率の高い公立校の受験者数が減少するのは意外な結果でした。

サンデーショックで受験者数が増加したように見えた私立校は、'16年度入試では減少するように思えますが、実質的な減少ではありません。実質的には国立と同じように微増

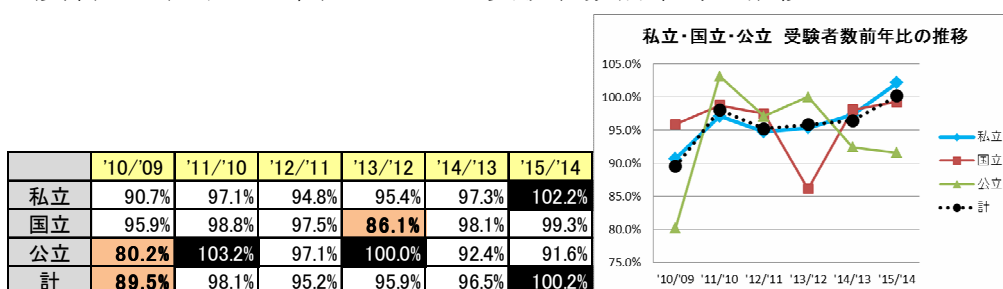


となると思われます。’14年度と’15年度で顕著に減少した公立校ですが、2年間も減少し続けたことで’16年度入試では、増加することも考えられます。

〈資料1-1〉適性試験を実施した私立校数の推移

学校数	'10年	'11年	'12年	'13年	'14年	'15年
適性試験実施	5	1	3	5	8	14
適性試験廃止	0	0	0	0	0	1
累計適性試験実施	5	6	9	14	22	35

〈資料1-2〉私立・国立・公立 受験者数前年対比推移



〈資料1-3〉受験者数増減率（'09を100%としたとき'15/'09）

	'15/'09
私立	79.2%
国立	77.5%
公立	68.1%
計	77.4%